

軽声について

辻田正雄

〔抄録〕

軽声の扱いが規範的な辞書の間でも不統一である。「上声+軽声」の上声の調値が2種類存在するのは軽声詞の語彙の形成時期の違いによる。辞書の記述に従えば軽声は減少の傾向にあるようであるが、現時点ではまだゆらぎがあり、現実の口語音では必ずしも減少しているとはいえない。『現代漢語詞典』は規範を重視しながらそのような現実をできるだけ反映しようとしている。

キーワード 普通話水平測試、上声+軽声、現代漢語詞典、重読

1. 問題の所在

普通話の軽声はいわゆる中国語らしさに重要なものとされる。たとえば、普通話の語音弁別を目的に編まれた教科書とでも言うべき基本書である『漢語普通話語音辨正』には次のように記されている。

「軽声は普通話の語音のひとつの重要な特長であり、外国人にとってかなり難しいものであるばかりでなく、中国のいくらかの方言区の人がマスターするのもそれほど簡単なことではない。だが、普通話に軽声が存在するがゆえに普通話の表現力が豊かになっているのである。それゆえ、きれいな普通話を身につけようと思えば、軽声を習得することは重要なことからのひとつである」⁽¹⁾。

また、外国人留学生への現代漢語語音教育を中心とした研究書や学習書も軽声に一定の紙幅をあてている⁽²⁾。

中国の語文教師やアナウンサーなどの普通話は、一定のレベル以上であることが定められ、そのための試験である普通話水平測試が実施されることになった。1994年10月30日に「關於開展普通話水平測試工作的決定」が下達された。教育部門や放送関係者など、受験しなければならないものが定められた⁽³⁾。その実施される測試の内容及び評価基準等は「普通話水平測試

大綱総論」によって知ることができる⁽⁴⁾。その第2項の2に二音節の詞語を50読むことが定められており、そのうち軽声については必ず含むものとし、その数は3を下まわらないことと、その数にまで言及している⁽⁵⁾。実際には軽声は4～6の詞語を出題するのが多いようである⁽⁶⁾。

測定の第2項の意義について段文勝は次のように説明している。

「詞語あるいは語流のなかでの軽重格式は普通話と方言の語感を区別する重要な指標である」。そして「第2項の測定は普通話らしさ——軽重格式及び軽声、上声の変調、儿化等が規範に合致しているかどうかを重視するものである」⁽⁷⁾。

ここで明らかなように軽声は普通話と方言の語感を区別するものであり普通話らしさを反映した特長のひとつということになる。

各地方で測定対策用の参考書や問題集が出版されているが、いずれもが軽声をとりあげている。たとえば浙江省のものでは「軽声」の項を設け「軽声音節的読法」を説明し練習題を列記している⁽⁸⁾。

また、粵語方言区向けの一冊⁽⁹⁾では15組の練習題はそれぞれリスニング試験問題と参考答案から成るが、そのすべてに二音節の詞語の朗読があり、必ず軽声がいくつか含まれている。

測定の語音評定の基本方針は公開されているが、そのうち軽声詞にかんする部分は次の通りである。

- (1) 工具書や教科書や「大綱」が軽声に注音している詞語を軽声に読まないのは減点。
- (2) 工具書や教科書や「大綱」が軽声に注音していない詞語を軽声あるいは軽音に読むのは減点。そしてこれには実際の口語でも重・次軽格式に読まないものも含まれる⁽¹⁰⁾。

両読については厳格さは要求されていないが、軽声の扱いが参考書によってもまた同じ辞書でも版本によって違いが生じている。主なものを比較してみよう。

- (甲) 『大綱』⁽¹¹⁾
- (乙) 『現代漢語詞典』⁽¹²⁾
- (丙) 『漢語拼音詞匯』⁽¹³⁾
- (丁) 『HSK』⁽¹⁴⁾

詞語	甲	乙	丙	丁
前 辺	qián biān	qián•bian	qián bian	qián biān
後 辺	hòu bian	hòu•bian	hòu bian	hòu biān
黄 瓜	huáng gua	huáng•gua	huáng gua	huáng guā
点 綴	diǎn zhuì	diǎn•zhuì	diǎn zhuì	diǎn zhuì

このような不統一は応試者のみならず多くの学習者を困惑させるものである。

本稿は軽声の規範の問題を中心に、不統一を手がかりにその他、軽声の変化や辞書と現実の口語音の相違についても検討を加えようとするものである。

2. 軽声の規範

軽声が問題にとりあげられるようになったのは国語運動と関連する。言文一致を掲げ口語を重視するなかで、何を規範的な語音とするのか、またその語音をどのように表記するのかが論議されるようになってから軽声も本格的に研究されるようになった。

魯允中によれば⁽¹⁵⁾「軽声」という概念を最初に提起したのは趙元任「国語羅馬字研究」(『国語月刊』第一卷第七期 [1922年8月20日]⁽¹⁶⁾)である。趙元任は声調をどのように表記するかについて述べた部分で「軽音」の語を用いて次のように述べている。

「陰平調加h」、「去声不用符号」、「軽音字永遠輕読的也用去声符号(就是不用符号)。偶爾輕読仍照原来声調写。(這類字的音本来是中性的短音, 去声的声高也是不高不低, 読短些也差不多。例如“先生”的“生”是軽音, 所以就和“先勝”念快了差不多)」⁽¹⁷⁾。

趙元任はその後「軽音」に替えて「軽声」の用語を用いる。勁松によれば⁽¹⁸⁾ 趙元任は『国語新詩韻』(1923年)で「不高不低的“軽”声」という表現で軽声の語を使用しているという。正式に「軽声」の語が用いられるのは『新国語留声片課本』⁽¹⁹⁾からである。これより以後「軽声」が用いられほぼ定着しているが、「軽音」を用いる研究者もいるし、この両者を違う概念として厳密に区別する意見もある⁽²⁰⁾。

軽声の規範の原則は1950年代に提起されている。承融による整理に従って次に記してみよう⁽²¹⁾。

軽声に読むもの(承融の用語を原文のまま使用)：

一. 助詞

1. 語気助詞
2. 結構助詞
3. 時態助詞

二. 虚字詞尾

三. 方位詞

四. 趨向動詞

五. 疊詞

1. 名詞重疊の第二個音節
2. 動詞重疊の第二個字
3. 双音節形容詞重疊の第二個音節

六. “不”字和“一”字

1. 挿入動詞、形容詞重疊中間
2. 挿入兩個字中間

七. 表約数的詞

- 八. 某些表单位的量詞
- 九. 代表做賓語, 沒有对照的意思, 也不表示強調
- 十. 表承諾的詞
- 十一. 詞嵌 (A□AB、A□BC、A□BB 格式)
- 十二. 動詞後表処置的補語
- 十三. 兩個对立的詞構成聯合式的合成詞 (改變了本意) 的第二個字
- 十四. 双音節單純詞的第二個音節
- 十五. 有些双音節合成詞的第二個字

このうち十三は具体例として“買賣 (做生意)”、“来往 (交情、關係)”、“是非 (惹出事情)”、“東西 (物件)”の詞語が挙げられる。十四は“葡萄”、“玫瑰”、“馬虎”、“哆嗦”がそうである。十五は“先生”、“事情”、“暖和”の例が挙げられるが、法則性のないものである⁽²²⁾。ただ、「(1) 有些詞因詞性不同、分為兩種念法、如“練習、報告”作動詞、“和平”作形容詞念轻声、転為名詞用時則照原来的声調念。(2) 念轻声の多半是口頭上資格較老的詞、新名詞、科学名詞等一般不念轻声」ということが傾向としてあるとされる。基本的にこれは今日にいたるまで踏襲されている考え方であろう⁽²³⁾。

しかしながら、なぜ轻声になるものとならないものがあるのか、轻声は時代とともに変化しているのか、それは非轻声化に進んでいるのか、また上声+轻声になぜ2種類の型があるのか等々、問題は実に多い。以下、これらの問題を検討していく⁽²⁴⁾。

3. 上声+轻声

周知の通り、上声+轻声 (本調、上声) にはふたつの型がある。ひとつは“馬虎”のように [211⁽²⁵⁾ + 轻声] に発音される型、もうひとつは“哪里”のように [35 + 轻声] と発音される型である。

馬元書は次のようにまとめている⁽²⁶⁾。

一. “馬虎”型

1. 子後綴型
2. 疊字名詞型
3. AB型
 - ①第二個字的本調属上声的
 - ②第二個字的本調属非上声的

二. “哪里”型

1. XY型
 - ①第二個字的本調属上声的

②第二個字的本調属非上声的

2. 疊字動詞型

ここで問題になるのは一、3のA B型①と二、1のX Y型①である。前者としては“馬虎”のほか“耳朵”、“頭摆”など、後者には“哪里”のほか“小姐”、“想法”、“法子”などがそれぞれ例として挙げられる。上声+轻声の上声の調値がなぜ2種類あるのだろうか。

京諾拉は変調を考察するなかで上声+上声の変調に言及し、上声+轻声のうち虚意後綴は半上声となり実意後綴は陽平になると結論した⁽²⁷⁾。

李明は京諾拉の説に検討を加え、「上声+轻声」を更に詳細に分類した。「上声+轻声」で「211+轻声」になるのは、

1. 後附加式

- a. “点子”など
- b. “耳朵”など

2. 重疊式

3. 単純詞

であることを検証し、その他方言詞起源のものを分けて考えるべきだとした⁽²⁸⁾。

しかしながらこの問題は歴史的に考察すべきであろう。ふつう漢字は語音の軽重変化を反映できない⁽²⁹⁾。

だが、陳国は鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜經』の残本を用いて、韻母または声母の転写形式を分析して轻声の出現時期を証明しようとした⁽³⁰⁾。

李栄は『金瓶梅詞話』中の一部の語彙についてその異文を比較したり、抄本間の異文を対比させるという方法によって、その時代にすでに軽音として読まれていたと推測した⁽³¹⁾。

また、李思敬は『紅樓夢』を用いて18世紀には軽音が普通にみられていたと結論しているという⁽³²⁾。

同様の方法を用いて轻声の歴史的変化を探ったのが金有景である。北京語の「上声+轻声」の組合せの変調は北京語の轻声の歴史的層と大いに関係がある。金有景は語法構造の特長に着目し、北京語の現在の轻声字は次のA～Eの5つの時期に形成されたと仮定した⁽³³⁾。

A時期 轻声発生時期 (8、9世紀)

B時期 “子尾、儿尾”の轻声化 (10、11世紀)⁽³⁴⁾

C時期 動詞尾“過”、“得”の轻声化 (12、13世紀)

D時期 “了、着、嗎、呢”の轻声化 (13、14世紀)

E時期 “老・虎”、“小・姐”等の後の字の轻声化 (15、16世紀以後)

「上声+轻声」の問題については、金有景に従えば少なくともD時期前後に北京語の二字の組合せの上声は次の2つの型に変調したと考えられる。

- (1) 上声+上声 → 陽平+上声

(2) 上声+軽声 → 半上声+軽声

そしてE時期になると上記(1)型の後の方の上声も軽声化したが、陽平に変調した前の方のもと上声は陽平のままであったので

陽平+上声 → 陽平+軽声

のようになったのである⁽³⁵⁾。

語法成分あるいは虚詞素の軽声化は語彙成分あるいは実詞素の軽声化よりも時期的に早く、弁義作用をもたない軽声は弁義作用をもつ軽声よりも早い時期のものである。

しかしながら、同じように語彙成分でありながらあるものはおそらくB時期にすでに軽声化しているのに対し、あるものは語の連続による変調の後に軽声化している。

これは北京語と満州語の影響関係から考えなければならぬようだ。趙杰は、北京語の軽声は満州語の軽音と関係があると述べている⁽³⁶⁾。つまり、北京語の軽声詞は、漢語の発展変化を来源とするものと、満州族が北京内城に移住して北京語が満州京語(満州族の漢語)の軽音の影響を受けて生まれたものの2種類がある。満州語は声調のない言語で、満州語の音の重軽が旗人を通じて北京語に影響を与えたことが関係している。「上声+軽声」が「211+軽声」になる単語で、たとえば“响午”、“姐姐”、“早起”、“腭腭”、“耳朵”、“頭摆”などは北京旗人の口語の基本語彙であることもこのことを証明しているという。

満州語源の北京語についてみてみよう。

北京語の「拉忽(拉、上、重。忽、軽)」は満州語の“lahū”より、「虎勢(虎、上、重。勢、軽)」は“hūsun”より転じたものである。その他『北京土話中的満語』⁽³⁷⁾に収める単語の例でも判るように、満州語源の北京語の二音節語はほとんどが軽声詞である。それぞれの満州語の軽音については確認しえないが、「満語京語は重音前移を経た口語である」⁽³⁸⁾ことを論拠にする趙杰の説がかなり有効であると思われる。

4. 軽声の変化

軽声詞は増加しているのかあるいは減少しているのか。この問題は1950年代から議論されている。高景成は「軽声詞は徐々に衰退の趨勢にある」⁽³⁹⁾と述べ、江成は軽声詞の変化について中重から両読へそして重軽へと向かっている⁽⁴⁰⁾と反対の意見を述べた。

1960年代に那須清は「革命前と革命後に出版された信頼しうる資料から2音節の軽声詞を採集し」⁽⁴¹⁾比較した。慎重に断定は避けられているが、掲げられた資料から判断すれば軽声詞は減少の傾向にあることになる。

それ以降も同様の議論は続き、厲為民は「軽声詞の数はまだ増加するであろう」⁽⁴²⁾と予想し、巴維爾は「軽声詞は多分今でもまだ新たに生まれているだろう」⁽⁴³⁾と述べた。一方で蘇少波は、軽声は減少していると断言する⁽⁴⁴⁾。

この問題について、規範的とされる辞書での扱いの変化から考えてみよう。

軽声をはじめて辞書に記したのは『国語辞典』⁽⁴⁵⁾である。その序で黎錦熙は次のように述べ、軽声の表記についても説明した。

「軽声には2種類ある。ひとつは「軽而无調」のもの、つまり陰平、陽平、上声、去声以外の軽声、たとえば「枇杷」の「杷」は、国音はもともと陽平 [pá] であるが、国語の「枇杷」という語は軽声の [・pa] に読むか、場合によっては変音した [・ba] に注音するがこれは「又読」である。もうひとつは「有調而軽」のもので、二音節の単語で前の音が重読されると後の音は自然と軽くなるもの、たとえば「電話」の2音が軽重の別なく同じに読まれるのに対し、「笑話」は「笑」が重読され「話」は自然と軽くなる」⁽⁴⁶⁾。

『国語辞典』のこの軽声表記は『現代漢語詞典』に継承されている。

辞書での軽声詞の扱いはどうなっているのか。勁松は『現代漢語詞典』の1992年版と1998年版を比較し軽声詞の変化を調

A	(1) 1998年版新収録の両読詞	2 6
	(2) 1998年版新収録の軽声詞	4 9
	計	7 5
B	(1) 1998年版で収録されなくなった両読詞	4
	(2) 1998年版で収録されなくなった軽声詞	2 1
	計	2 5
C	(1) 1992年版で軽声、1998年版で両読詞	6 5
	(2) 1992年版で軽声、1998年版で非軽声詞	1 1
	(3) 1992年版で両読、1998年版で非軽声詞	1 2
	計	8 8
D	(1) 1992年版で非軽声、1998年版で両読詞	1 2
	(2) 1992年版で非軽声、1998年版で軽声詞	2
	(3) 1992年版で両読、1998年版で軽声詞	6
	計	2 0

査した。そのうち機能性の二音節の軽声詞についてその数を上のような表にまとめた⁽⁴⁷⁾。

このうちC、Dに相当する変化を他の版本及び他の資料と比較して、軽声詞の変化をもう少し詳しく検討してみよう。用いる資料は次の通りである⁽⁴⁸⁾。

- ① 『現代漢語詞典』1978年版(「現漢78」と略記)⁽⁴⁹⁾。
- ② 『現代漢語詞典』2002年版(「現漢02」と略記)⁽⁵⁰⁾。
- ③ 『普通話水平測試大綱』(「大綱」と略記)⁽⁵¹⁾。
- ④ 『北京話軽声詞滙表』(「京軽」と略記)⁽⁵²⁾。

但し、『現代漢語詞典』で方言詞とされている詞語及び三音節詞語は除外した。— は未収を示す。

C-(1) 1978年版で軽声、2002年版で両読詞

詞語	現漢 78	現漢 02	大綱	京軽
肮脏	āng·zang	āng·zāng	āngzāng	āngzang
白天	bái·tian	bái·tiān	bái·tian	báitiān
本钱	běn·qian	běn·qián	běn·qian	běnqian
变通	biàn·tong	biàn·tōng	biàntōng	biàntong
别致	bié·zhi	bié·zhì	biézhì	biézhì
宾服	bīn·fu	bīn·fú	——	——
残疾	cán·ji	cán·jí	cán·ji	cánji
成分	chéng·fen	chéng·fēn	chéng·fen	chéngfen
吃食	chī·shi	chī·shí	——	chīshi
船钱	chuán·qian	chuán·qián	——	chuánqian
聪明	cōng·ming	cōng·míng	cōng·ming	cōngming
褡包	dā·bao	dā·bāo	——	dābao
当铺	dàng·pu	dàng·pù	dàngpù	dàngpu
得罪	dé·zui	dé·zuì	dé·zui	dézui
底细	dǐ·xi	dǐ·xì	dǐ·xi	dǐxi
点缀	diǎn·zhui	diǎn·zhuì	diǎn·zhui	diǎnzhui
定钱	dìng·qian	dìng·qián	——	dìngqian
反正	fǎn·zheng	fǎn·zhèng	fǎn·zheng	fǎnzheng
风水	fēng·shui	fēng·shuǐ	fēng·shui	fēngshui
干系	gān·xi	gān·xì	gān·xi	——
寒毛	hán·mao	hán·máo	——	hánmao
横竖	héng·shu	héng·shù	héng·shu	héngshu
家具	jiā·ju	jiā·jù	jiājù	jiāju
缰绳	jiāng·sheng	jiāng·shéng	jiāng·sheng	jiāngsheng
进深	jìn·shen	jìn·shēn	——	——
客人	kè·ren	kè·rén	kè·ren	kèren
拉拢	lā·long	lā·lǒng	lā·long	lālong
迷惑	mí·huo	mí·huò	míhuò	míhuo
米汤	mǐ·tang	mǐ·tāng	——	mǐtang

内人	nèi·ren	nèi·rén	nèi·ren	nèiren
敲打	qiāo·da	qiāo·dǎ	qiāo·da	qiāoda
拳头	quán·tou	quán·tóu	quántou	quántou
赏钱	shǎng·qian	shǎng·qián	shǎng·qian	shǎngqian
似乎	sì·hu	sì·hū	sìhū	sihu
堂客	táng·ke	táng·kè	——	tángke
体谅	tǐ·liang	tǐ·liàng	tǐliàng	tǐliang
体面	tǐ·mian	tǐ·miàn	tǐ·mian	tǐmian
替换	tì·huan	tì·huàn	tìhuàn	tìhuan
挑剔	tiāo·ti	tiāo·tī	tiāo·ti	tiāoti
痛快	tòng·kuai	tòng·kuài	tòng·kuai	tòngkuai
徒弟	tú·di	tú·dì	tú·di	túdi
下场	xià·chang	xià·chǎng	xià·chang	xiàchang
响声	xiǎng·sheng	xiǎng·shēng	xiǎngshēng	xiǎngshēng
小姐	xiǎo·jie	xiǎo·jiě	xiǎo·jie	xiǎojie
絮叨	xù·dao	xù·dāo	xù·dao	xùdao
摇撼	yáo·han	yáo·hàn	——	yáohan
摇晃	yáo·huang	yáo·huàng	yáohuàng	yáohuang
意见	yì·jian	yì·jiàn	yìjiàn	yìjian
抹布	zhǎn·bu	zhǎn·bù	——	zhǎnbu
招惹	zhāo·re	zhāo·rě	——	zhāore
折磨	zhé·mo	zhé·mó	zhé·mo	zhémo
支撑	zhī·cheng	zhī·chēng	zhīchēng	zhīcheng
支吾	zhī·wu	zhī·wú	zhī·wu	zhīwu
知道	zhī·dao	zhī·dào	zhī·dao	zhīdao
值得	zhí·de	zhí·dé	zhí·de	zhíde
志气	zhì·qi	zhì·qì	zhì·qi	zhìqi
中幡	zhōng·fan	zhōng·fān	——	——
周到	zhōu·dao	zhōu·dào	zhōu·dao	zhōudao
主人	zhǔ·ren	zhǔ·rén	zhǔrén	zhǔren

C-(2) 1978年版で軽声、2002年版で非軽声

詞語	現漢 78	現漢 02	大綱	京軽
吃喝儿	chī·her	chīhēr	——	chīher
船家	chuán·jia	chuánjiā	chuán·jia	chuánjia
定規	dìng·gui	dìngguī	——	dìnggui
管教	guǎn·jiao	guǎnjiào	guǎn·jiao	guǎnjiao
光润	guāng·run	guāngrùn	——	guāngrun
近视	jìn·shi	jìnshì	jìn·shi	jìnshi
口音	kǒu·yin	kǒuyīn	kǒuyīn	kǒuyin
面食	miàn·shi	miànshí	miànshí	——
生发	shēng·fa	shēngfā	——	——
松动	sōng·dong	sōngdòng	sōngdong	sōngdong
找寻	zhǎo·xun	zhǎoxún	zhǎoxún	zhǎoxun

C-(3) 1978年版で両読、2002年版で非軽声

詞語	現漢 78	現漢 02	大綱	京軽
操持	cāo·chí	cāochí	cāochí	cāochi
插口	chā·kǒu	chākǒu	——	chākou
茶水	chá·shuǐ	cháshuǐ	cháshuǐ	——
车钱	chē·qián	chēqián	chēqián	chēqian
程度	chéng·dù	chéngdù	chéngdù	chéngdu
景致	jǐng·zhì	jǐngzhì	——	jǐngzhi
靠山	kào·shān	kàoshān	kàoshān	kàoshan
夸奖	kuā·jiǎng	kuājiǎng	kuājiǎng	kuājiang
柔和	róu·hé	róuhé	róuhé	róuhe
傻气	shǎ·qì	shǎqì	shǎqì	shǎqi
小月	xiǎo·yuè	xiǎoyuè	——	xiǎoyue
这些	zhè·xiē	zhèxiē	zhèxiē	zhèxie

D-(1) 1978年版で非轻声、2002年版で両読

詞語	現漢 78	現漢 02	大綱	京軽
报应	bàoyìng	bào·yìng	bàoyìng	bàoyìng
茬口	chákǒu	chá·kǒu	——	——
惦记	diànjì	diàn·jì	diànjì	diànjì
饭量	fànliàng	fàn·liàng	fànliàng	fànliàng
怪道	guàidào	guài·dào	——	——
锅盔	guōkuī	guō·kuī	——	guōkuī
纪念	jìniàn	jì·niàn	——	——
老气	lǎoqì	lǎo·qì	——	lǎoqì
阵势	zhènshì	zhèn·shì	zhènshì	——
置换	zhìhuàn	zhì·huàn	——	——
住处	zhùchù	zhù·chù	——	——

D-(2) 1978年版で非轻声、2002年版で轻声

詞語	現漢 78	現漢 02	大綱	京軽
端量	duānliàng	duān·liang	——	duānliang
工夫	gōngfū	gōng·fu	gōngfu	gōngfu

D-(3) 1978年版で両読、2002年版で轻声

詞語	現漢 78	現漢 02	大綱	京軽
出息	chū·xī	chū·xi	chūxi	chūxi
缴裹儿	jiǎo·guǒr	jiǎo·guor	——	jiǎoguoer
亲戚	qīn·qì	qīn·qi	qīnqi	qīnqi
跳蚤	tiào·zǎo	tiào·zao	tiào·zǎo	tiào·zao
先是	xiān·shì	xiān·shì	——	——
种子	zhǒng·zǐ	zhǒng·zi	zhǒngzi	——

以上の比較からは、軽声詞が減少する傾向にあるらしいと推測することはできるが、新たに軽声になるものについては説明できない。

ただこのことから明らかになったことは、「大綱」は必ずしも『現代漢語詞典』のいずれかの版本に全面的に依拠しているわけでもないし「北京話軽声詞滙表」に従っているわけでもないということである。それぞれが規範と現実のはざままで独自に詞語の審音を行っていると考えられる。そして現実の口語音は多様である。

5. 軽声去化

口語音は規範的でないものも多い。陳剛は軽声であるべきところを去声で読まれる単語があることをとりあげた。たとえば“石榴”、“玫瑰”、“希罕”等がそうであり、これは北京人にみられる特長で、陳剛はこのような現象を「軽声去化」と呼んだ⁽⁵³⁾。

これを承けて王旭東は1990年6月に北京の中等教育機関で語音調査を行ない、この北京語の「軽声去化」現象は単に朗読中に見られるばかりでなくかなり普遍的に見られるとした。そして「績」や「迹」が1985年12月発表の「普通話異読詞審音表（1985年12月修訂）」で去声に統読されたのはそのことを説明していると述べた⁽⁵⁴⁾。

確かにこれに関連する資料によってもその通りである。主な辞書類の記載をみてみよう。

- ① 張洵如編『北京話軽声詞滙』中国語文雑誌社、1957年10月、P.79

成績 chéngjì

- ② 『漢語拼音詞滙』

初稿（1958年12月） chéngjì

増訂稿（1963年12月） chéngjì

1989年重編本（1991年1月） chéngjì

- ③ 『新華字典』 「績」「迹」

1971年修訂第4版 jì

1979年 第5版 jì

1987年 第6版 jì

1990年 第7版 jì

もし、このような「軽声去化」がはっきりとした傾向として存在するのであれば、これも軽声が減少していることを示すものであろう。しかしながら、勁松が言うように⁽⁵⁵⁾、語音調査とりわけ若年層に対する朗読調査はどうしても不自然な「教科書棒読み調」になりやすく、自然な口語を反映されることは難しいであろう。

また「績」の審音が“jì”から“jì”に変わったのは、『広韻』に「入声 績、則歴切」とあるように現実には長い間“jì”で読まれていたからであろう。

その他にも『現代漢語詞典』で去声あるいは去声と轻声の両読とされている単語で北京の口語音では轻声であるものはかなり多く存在する⁽⁵⁶⁾。

これらの例は口語音の調査、審定の難しさと辞書記述の難しさを示していると言えよう。

6. 結語

轻声詞の扱いが規範的とされる資料間で不統一であるばかりではない。規範文献の轻声の例示そのものが不統一あるいは判りにくいものとなっている。

たとえば「漢語拼音正詞法基本規則」⁽⁵⁷⁾をとりあげてみよう。その4.2.2は「mén-wàimian (門外面)」「hélimian (河里面)」「huǒchēshàngmian (火車上面)」でここに用いられている「面」はすべて轻声である。しかし4.7.2の「zàiqiánmiàn (在前面)」の「面」は去声に注音されている。これは「外面」「里面」「上面」「前面」などの「面」が単純方位詞と組合わさった時の語音の原則が定まっていなかったことが原因なのであろうが、困惑してしまう記述である。また同文献の4.8.2の「糊里糊涂」の注音が「húlihútu」となっているが普通この四字格の末字は轻声に読まれない⁽⁵⁸⁾。

その他、方位詞「下」「上」「辺」「里」、量詞「個」、趨向動詞などについても規範的辞典や教科書間でも不統一のあることが報告されている⁽⁵⁹⁾。

中国の学校教育では普通話の普及をめざしている。「關於小学普及普通話的通知」で小学生に対する要求として「最低限度の轻声詞と儿化詞が読めるようにすること」⁽⁶⁰⁾が掲げられている。この「最低限度」とは必読の轻声詞であるが、この必読轻声詞が辞書によりあるいは同じ辞書でも版本によって異なっているのである。そして現実に優先されるのは辞書ではなく自分たちの話す口語である。実際の口語のなかでは自然さという点では轻声、重音が重要な意味を持っているからである⁽⁶¹⁾。

勁松は女性に非轻声化の傾向がみられるという。そして中国の初等教育を主に担っているのは女性であるから、彼女たちの普通話が次の世代に影響を与えるはずであるから将来轻声は減少するであろうと予測している⁽⁶²⁾。ただ現時点では、轻声が増加しているとも減少しているとも断定できない。多くの辞書に重読が示されないのが現実である。またそれは困難な作業でもある。口語音を重視する教育や放送などの現場では当分の間、轻声詞を統統することは困難であろう。そうしてみると『現代漢語詞典』の各版の轻声詞の変化や表記法の工夫は、規範を求めながらできるだけ現実の口語音に充実であろうとする苦心の試みとして評価してよいと思われる。

〔注〕

- (1) 李明、石佩雯編著『漢語普通話語音辨正』北京語言學院出版社、1986年3月第1版 P.145、北京語言文化大學出版社、1988年1月第2版 P.149。但し、第1版と第2版に内容的相違はない。
- (2) たとえば下記を参照。
 - a. 朱川主編『外国學生漢語語音學習對策』語文出版社、1997年7月。
 - b. 趙全銘主編『語音研究與對外漢語教學』北京語言文化大學出版社、1997年7月。
- (3) 拙稿「『普通話水平測試大綱』について」『文學部論集』第86号(佛敎大學、2002年3月)参照。
- (4) 拙稿「規範化と普通話水平測試」『文學部論集』第87号(佛敎大學、2003年3月)参照。
- (5) 國家語言文字工作委員會普通話培訓測試中心、『語言文字應用』編集部合編『普通話水平測試的理論與實踐』商務印書館、1998年9月第1版 P.207。
- (6) 王永紅「普通話水平測試中輕聲的誤讀」『語言文字周報』2003年7月23日。
- (7) 段文勝「讀普通話水平測試第二項的測試意義」『語言文字周報』2003年7月16日。
- (8) 浙江省語言文字工作委員會編『普通話訓練與測試』浙江攝影出版社、2001年4月、P.72—P.77。
- (9) 湯力文編著『普通話水平測試習題集(粵語區)』北京大學出版社、1998年4月。
- (10) 宋欣橋「普通話水平測試評分中的幾個問題」『語言文字應用』1997年第3期[8月]。
- (11) 劉照雄主編『普通話水平測試大綱(修訂本)』吉林人民出版社、1994年11月第1版、2001年2月第8次印刷本を使用。
- (12) 中國社會科學院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典(2002年增補本)』商務印書館、2002年5月修訂第3版(增補本)、2002年6月北京第293次印刷本を使用。
- (13) 『漢語拼音詞匯』編寫組編『漢語拼音詞匯(1989年重編本)』語文出版社、1991年1月第1版を使用。
- (14) 黃南松、孫德金主編『HSK詞語用法詳解』北京語言文化大學出版社、2000年4月第1版第1次印刷本を使用。
- (15) 魯允中『普通話的輕聲和儿化』商務印書館、1995年5月、P.1。
- (16) 『國語月刊』第一卷第七期は刊記によれば1922年8月20日刊である。第六期は7月20日刊、第八期は9月20日刊であるのでこの号が8月20日刊で問題はなさそうである。しかし、拙稿で参照したこの号の胡適の「卷頭言」は1923年1月12日付であり錢玄同の付記は1923年1月14日付である。この号は『國語月刊』の「特刊」で「漢字改革号」として刊行されたものである。あるいは後に増刷発行されその時に「卷頭言」が加えられたのかもしれない。『胡適著訳繫年目錄與分類索引』(上海人民出版社、1984年1月)はこの「卷頭言」について「載1923年3月『國語月刊』第一卷第七期」とする。
- (17) 趙元任「國語羅馬字的研究」『國語月刊』第一卷第七期、P.99。
- (18) 勁松『現代漢語輕聲動態研究』民族出版社、2002年1月、P.3。
- (19) 趙元任『新國語留聲片課本 甲種注音符號本』商務印書館、1935年2月、P.14—P.17。趙元任『新國語留聲片課本 乙種羅馬字本』商務印書館、1935年2月、P.10—P.12。
- (20) 主なものに、周兵兵「輕讀與輕聲辨」『語言文字周報』2002年10月30日、がある。周兵兵は輕聲の定義を嚴格にして、「重・最輕」格式のみを輕聲とし「重・次輕」格式を輕讀とする。それゆえ『現代漢語詞典』で兩讀扱いのものは輕讀とする。たとえば[便當 biàn・dāng]は輕聲で[干糧 gān・liáng]は輕讀としている。拙稿は『現代漢語詞典』の兩讀詞も輕聲とする。
- (21) 承融「念輕聲的規律」『文字改革』1959年第2期[1月30日]。
- (22) 二音節詞語の重音については先行研究に、徐世榮「雙音綴詞的重音規律」『中國語文』1956年2月号があり、承融の一文は主としてこれに拠っている。
- (23) たとえば、姚建宏「談談輕聲的規律」『語言文字周報』2001年6月6日を参照。
- (24) 先行研究は注(15)及び注(18)所収の參考文獻目錄によって知ることができる。本稿はこれらの多くの參考文獻、とりわけ多くの点で注(18)の勁松(2002)に依拠している。
- (25) 五度標記法による。但し、馬元書や勁松は「21」と表わす。

- (26) 馬元書「轻声中的“‘馬虎’型”与“‘哪里’型”」『語言文字周報』2002年9月18日。
- (27) 京諾拉「在變調方面的一個小問題」『語言教学与研究』1981年第4期 [12月10日]。
- (28) 李明「關於轻声語素前的上声變調問題」『語言教学与研究』1983年第2期 [6月10日]。
- (29) 勁松、前掲、P.51。
- (30) 陳国「漢語輕音的歷史探討」『中国語文』1960年3月号。
- (31) 李栄「旧小説里的輕音字例积」『中国語文』1987年第6期 [11月]。
- (32) 李思敬「現代北京話的輕音和儿化音溯源」『語言研究』2000年第3期。但し、勁松、前掲、P.54に拠る。
- (33) 金有景「北京話“上声+轻声”的變調規律」山東省語言学会編『語海新探』（第一輯）山東教育出版社、1984年11月、所収、P.276-P.293。
- (34) 金有景、前掲、P.279は「12、13世紀」となっているが、「10、11世紀」の誤植であろう。
- (35) 勁松、前掲、P.55の整理を参照。
- (36) 趙杰「北京話的滿語底層和“輕音”、“儿化”探源」北京燕山出版社、1996年3月。満州語については不案内であるので、拙稿は勁松、前掲、P.56-P.60の整理、検討に依拠している。
- (37) 愛新覺羅・瀛生「北京土話中的滿語」北京燕山出版社、1993年7月、P.224-P.243。
- (38) 趙杰、前掲、P.165。その他に主として満州語の語彙から漢語の影響を論じたものに、趙杰『現代滿語与漢語』遼寧民族出版社、1993年7月、があり、輕読と音節の脱落や減音現象の關係に言及されている（主としてP.99）。
- (39) 高景成「由許多詞滙里看輕声衰頹的趨勢」『文字改革』1959年第2期 [1月30日]。
- (40) 江成「複音詞的輕重的整理問題」『中国語文』1956年5月号。
- (41) 那須清「革命前と革命後の中国語輕声詞彙」『現代中国語総合研究会会報』第1号（北九州大学中国学科研究室、1966年12月）。
- (42) 厲為民「試論輕声和重音」『中国語文』1981年第1期 [1月]。
- (43) 巴維爾（Paul Kratochvil）「北京話正常話語里的輕声」『中国語文』1987年第5期 [9月]。
- (44) 蘇少波「輕声讀音規範的問題」『語言文字周報』2002年4月17日。
- (45) 教育部国語推行委員会中国大辞典編纂処編『国語辞典（第一冊）』商務印書館、1937年3月。
- (46) 前掲『国語辞典』P.21-P.22。及び「凡例」P.5-P.6。但し、発音表記は現行の拼音に変えた。
- (47) 勁松、前掲、P.129。
- (48) これ以外に輕声詞を記した基本的資料として、中国文字改革委員会普通話語音研究班編『普通話輕声詞滙編』商務印書館、1963年8月、があるが所収語彙が少ないため比較を省略した。また両読を記すのは『現代漢語詞典』のみで、他の資料はいずれも両読を記していない。
- (49) 1978年12月修訂第2版、1979年1月北京第1次印刷本を使用。
- (50) 2002年5月修訂第3版（増補本）、2002年6月北京第293次印刷本を使用。これは修訂第3版（1996年7月）に「新詞新義」を増補として付したものである。この増補部分に収められた輕声詞は“diyī fū·rén”、“dǒu·fuzhā gōngchēng”、“mào·zixifǎ”、“wěi·ba gōngchēng”、“zhī·shì chǎnquán”のみであり、完全な新語に輕声詞はない。
- (51) 注(11)に同じ。
- (52) 魯允中、前掲、P.36-P.65。
- (53) 陳剛「北京人口頭不規範字音分析」『文字改革』1985年第6期 [12月]。
- (54) 王旭東「北京話輕声去化及其影響」『中国語文』1992年第2期 [3月]。
- (55) 勁松、前掲、P.150。
- (56) 「北京話輕声詞滙表」のうち*印のついている単語。
- (57) 国家技術監督局 1996-01-22批准、發布 1996-07-01実施「中華人民共和國漢語拼音正詞法基本規則」『語言文字規範手冊（1997年重排本）』語文出版社、1997年9月、所収。
- (58) 魏鋼強「語文規範文獻的自身規範」『中国語文』2002年第2期 [3月]、参照。
- (59) 邵敬敏「關於“輕声詞”的若干疑難問題」『語文建設』1999年第1期 [2月]。

- (60) 国家語言文字工作委员会、国家教育委员会发布「關於小学普及普通話的通知 (1990年12月29日)」国家語言文字工作委员会政策法规室編『国家語言文字政策法规匯編』語文出版社、1996年3月、所収、P.285。
- (61) 重音については趙元任が音位学の面から3種類に分類した(“A Grammar of Spoken Chinese”, Univ. of California Press, 1968, P.35-P.39)。また声学機器を用いた実験報告に下記がある。
- a. 林茂灿、顔景助「北京話軽声の声学性質」『方言』1980年第3期 [8月]。
- b. 林茂灿、顔景助、孫國華「北京話兩字組正常重音的初步実験」『方言』1984年第1期 [2月]。
- c. 林燾「探討北京話輕音性質的初步実験」『林燾語言学論文集』商務印書館、2001年8月、所収、P.120-P.141。
- その他、二音節常用詞の軽重の規則を探究したものとして、殷作炎「關於普通話双音常用詞輕重音的初步考察」『中国語文』1982年第3期 [5月]を参照。また、徐世栄「普通話語音講話・第十講 輕重音」『文字改革』1957年10月号を参照。
- 重誦はかつて中国語教育の現場で重視されていた。張廷彦『華語捷徑』文求堂書店、1924年2月、P.4-P.10、参照。
- (62) 勁松、前掲、P.60。

[付記]

本稿は、平成15年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

(つじた まさお 中国語中国文学科)

2003年10月15日受理